浦賀文化

令和２年（2020 年）１月１日
第 60 号
Email:uragabunka@yahoo.co.jp

大衆帰本塚の碑

江戸時代の西浦賀は、奉行所を中心に町がつくられていた。当時、大衆帰本塚が建てられていた浦賀警察署の辺りは町外れで、沼地があり、そこから蟹田川が流れ、一部は荒れ地であった。

大衆帰本塚の碑

浦賀警察署の並びに、烏帽子のような形をした石碑があります。この石碑は大衆帰本塚といい、そこには、幕末にペリー提督一行が浦賀沖に現われた時に、最初に黒船に乗り込んで交渉した浦賀奉行所与力・中島三郎助による文章が刻まれています。元々は現在の位置から見て後方にある丘の中腹にありましたが、この辺りの宅地開発が進むなかで、平成になってから今の場所に移転されたものです。

江戸時代、浦賀が湊の繁栄とともに発展する中、市中近くに火葬場やコレラなどの疫病により亡くなった人や行き倒れになった人々の無縁仏の墓地などがありました。時の浦賀奉行・大久保土佐守よりこれらを市中から離れた適地に移転させ、一カ所に集めて手厚く改葬する旨、言い渡されました。建立には浦賀奉行所の大工棟梁である川島平吉があたり、元治元年（一八六四年）に竣工しました。川島の依頼を受けて中島三郎助が筆を執った碑文には、碑がつくられた経緯とともに、亡き人々を千年の後までも供養しようとの思いが込められています。

「大衆帰本」の「大衆」は、「たいしゅう」または「だいしゅう」と読みます。仏教用語として使用する場合は「だいしゅう」が正しいようです。その意味は、一切衆生、生きとし生けるものを指します。また、「帰本」とは、もとのものに戻る、迷いの世界を脱して本来あるべきものに戻るといった意味があります。

石の材質は、箱根産の根府川石とされ、中島の筆跡がそのまま残されています。

碑の文章は奈良・平安朝の古文を思わせるような、万葉仮名が折り込まれた擬古文体で書かれています。たとえば、碑文に「ちかく盤薪こ流老翁」とあるのは「近くは薪樵る老翁」と、現代風の書き方に改めてから意味を取らなければならず、その上、流れるように達筆なくずし字で書かれているため、石碑を前にした現代人が読み取るのは容易ではありません。また、「わ蘿者裳由紀かふ道農堂よ里安しき」↓「童も行き交う道の便り悪しき」というように難解です。そこで、全文の現代語訳をご紹介しましょう。

◇　◇　◇

『この辺りの昔の様子を想像すると、沢のほとりに田圃があり、葦ガニなども住んでいたので、蟹田（かにた）と呼び始めたのであろう。最近では、薪（たきぎ）を切る老翁や牛を飼う子供が通行する程度の道で、不便な傾斜のある山かげの荒れ果てた野原なので、陽が昇れば消えてしまう草葉などにたまる朝の露や、しばらくすると見えなくなってしまうタベの煙のように儚い人々の葬りの跡を訪れる人でもなければ、分け入って行くこともない草むらになっている。

そのような状況であるが、天皇の治世がだんだん栄えてゆくのに伴って、湊の賑わいもますます盛んになり、野にも山にも家々が立ちこみ、往来も狭くなったので、かの、火葬のために立ちのぼる煙の末が、町中に横に薄く流れるようになり、人は皆、気分が晴れず、うっとうしく思い悩んでいたところが、この浦賀の湊全体のことを支配している大久保土佐守忠董（ただしげ）朝臣（浦賀奉行）の非常に素晴らしい決心により「その墓地をも火葬場をも、はるかに離れた山辺に移転させ、そのまま朽ちないで残っている古い亡骸（なきがら）をすべて一ヶ所に集めて埋葬し、大衆帰本の塚と呼ぶようにし、その記録をも残すように。」と定められたので、浦人全てが重んじたが、その中に川島平吉という者が、とりわけ、この定めを謹んで承り、その経過・理由を、また、石碑を十分吟味選定し、千年の後にも忘れさせないようにさせ、さらに、何本かの桜の木を植え添えて、昔の人の魂をも慰めたいという、立派で大層嬉しい心配りであり、何と心強くまじめな心であろうか。このように言っているのは、この浦賀の湊に役所が建てられ、そこに仕えている中島三郎助永胤である。』（湯田明氏・現代文訳）

（芳賀久雄）

★参考文献
・大衆帰本塚について　湯田　明著
・よこすかの文化財　横須賀市教育委員会
・中島三郎助文書　横須賀市教育委員会　中島義生著

発行：浦賀行政センター　編集：浦賀コミュニティセンター分館
〒239-0822 横須賀市浦賀７－２－１　☎ 046-842-4121　休館日 12/29～１/３

歴史語らい座

浦賀奉行所編　その十

郷土史家　山本　詔一

●奉行の交代●

弘化三年（一八四六年）、アメリカ東インド艦隊司令長官ジェームス・ビッドルが二隻の軍艦を率いて浦賀に来航したことで、江戸湾警備の見直しが計られた。その見直しの一環で、二人の浦賀奉行が相次いで交代をした。（当時、浦賀奉行は二人体制）

弘化四年（一八四七年）二月、一柳直方に代わって日光奉行であった戸田氏栄が着任した。戸田が日光奉行であった期間はわずか十五日余。一柳は戸田の後任として日光奉行になっている。両者は入れ替えのように見えるが、この時期になると浦賀奉行の地位は上昇しており、遠国奉行の序列からみると、一柳はどうみても左遷されたと思われる。

着任した時、戸田氏栄は四七歳、氏栄と書いて「うじひで」と呼んでいた。戸田を浦賀奉行に抜擢したのは、老中・阿部正弘であった。その背景には、ビッドル艦隊来航後、浦賀奉行所から提出された意見書に、江戸湾警備には軍艦が欠かせないことが記されており、この実現に向けて戸田を浦賀奉行に据えたものと思える。というのは、戸田の父・氏友が長崎奉行時代に西洋式の船の図面を手に入れており、この図面から軍艦建造の手がかりが得られるのでは、との思惑があったようだ。事実、嘉永二年（一八四九年）に浦賀で、小型ではあるが、大筒も搭載できる洋式船「蒼隼丸（そうしゅん）」が完成している。

戸田奉行は、浦賀の住民たちにも受けがよく、嘉永五年（一八五二年）二月、三度目の在地（浦賀）での勤務が終わり江戸へ戻ろうとすると、東西浦賀の住民から、転任反対運動がおこり、「戸田奉行が浦賀に残って下さるのなら、非常時はもちろん、その他の御用も身命の限りお仕えします。」とまで言っている。戸田は、嘉永七年（一八五四年）六月まで浦賀奉行を努めた。

二人目の交代は、戸田が着任してわずか三カ月後の五月、大久保忠豊に代わり浅野長祚（ながよし）が着任した。浅野は、当時三十才で、五二代続いた浦賀奉行の中で最年少であった。

浅野は、浦賀奉行に就任するとすぐに、台場の増築と大筒を洋式化することと、奉行所の各役職の増員と増給を望む意見書を提出している。また、年番で浦賀奉行所に勤務しているオランダ通詞の中で、特に、堀達之助を高く評価し、洋語辞典を浦賀に備え付け、堀の勤務延長を幕府に訴えた。しかしこれは却下されてしまった。こうした考えを持っていた浅野は、浦賀に在勤中、江戸湾警備についていた三浦・房総の四藩（川越・彦根・忍・会津）の実状を視察して、台場が旧式であることを問題視し、火器・砲術の早急な洋式化を提言した。

二人の奉行の関係は決して良好とは言えなかった。嘉永五年（一八五二年）閏二月、浅野奉行が突然辞表を提出し、浦賀奉行を辞任してしまった。（歴代の浦賀奉行の中で辞任をしたのは、浅野ただ一人）その浅野が書いた手紙に、「さてさてとんだ同役をとり、誠に誠にめいわく至極」と戸田を酷評していることからも不協和音が感じられる。

また、浅野には書画の鑑定という特技があり、さらに書はなかなかの腕前であった。西叶神社には、浅野が記した由緒を認めた額が掲げられている。

～俳句の散歩道～

青貝の虫耀くや煙草盆　石渡絹子

蜘蛛の囲に掛かる木の葉の色づけり　高麗淳子

笑話一題

私は横須賀に移り住んで三十年弱になります。海が好き、釣りが好きという理由であったのは確かなことです。

最近耳にした環境問題で海洋汚染、特にプラスティックごみに関して、このまま対策が進まなければ三十年後にはゴミの量が海の魚の量を超えるという恐ろしい予測もあります。

そもそも自然界には廃棄物も汚染もありません。すべては人間が行ってきたことの悪い面が表面化してきた結果です。

買い物のレジ袋の有料化や廃止、プラのストローを減らしていくことなどが世界的に広まっていることは良いことだと感じています。

先日、スウェーデン人の十六才の少女が国連のサミットで気候変動に関しての演説をし、訴えていたのは衝撃的でした。私たちも他人事と考えずにできることは小さな事でも多くの人で行動して、すぐそこにある横須賀の海を守っていきたいですね。

T＊A

第25回浦賀コミュニティセンター分館特別展

「浦賀大変！
黒船来航とかわら版」

会場：浦賀行政センター

【企画展示】
1月25日（土）～2月2日（日）
10:00～17:00
【基調講演】
1月25日（土）13:00～14:30
【ギャラリートーク】
期間中の金、土、日 11:00～12:00

問い合わせ：
浦賀コミュニティセンター分館
☎０４６－８４２－４１２１